平安時代の仮名文学における漢文訓読語

―「枕冊子」と「大鏡」にみる―

塚本美代子

目次

一、序論
二、本論
第一章　枕冊子と漢文訓読
第一節　漢文訓読語をそのまま引用したもの
第二節　漢文訓読語を日常会話語に言い和らげて引用したもの
第三節　漢文訓読特有語を用いてあるが、その部分の背景として特定の漢文の文献は想定されないもの
第二章　大鏡と漢文訓読
第一節
第二節
第三節
第四節
三、結論

序論

漢文訓読語は、これを文体史的に見る時、それだけが純粋の形で漢文訓読の際に用いられて後世に及んだばかりでなく、一方では仮名交り文・変体漢文・和漢混淆文などの形として、他種の文体と非常に深い関係を保ちつつ後世に及んだ。後世の文章の文体は、平安時代の和歌や和文よりも、むしろこれらの漢文訓読語や和漢混淆文などの勢力の方が強かったのではないかとさえ言いえる。

元来、『訓読』というものは、日本人が中国語を理解する場合、それを音韻・語法など全ての面で、そのままに理解し、その言語で思考するということが容易でなかったため、それを日本語に置き換えて理解する試みとして作り出された。これは一種の『翻訳』であるが、より原文に密着し、原漢文をなるべくそのまま日本語に置き換えようとしたものである。このようにして発生した漢文訓読語は、平安時代になると和語に対立する一語彙として認められるようになる。

訓読語と呼ばれることばは、古今集や源氏物語、所謂和文類のことばとはかなり異質な面が多い。この差は、男性語・男子語脈と女性語との対応だともいうし、文章語と日常会話語との差の面が大きいともいう。よって訓読語と比較する対象としては、和文類が最も典型的なものであろう。訓読文は、和文から受けた影響というものはあまり考えられないが、仮名文学作品は個々の作品ごとに、訓読から受けた影響の差こそあるがその影響力は大きかったようである。

本論では、平安時代の仮名文学作品「枕冊子」と「大鏡」この二作品をとりあげて、それぞれどのような点に漢文訓読の影響を受けているかを見ていくことにする。

本　論

第一章　枕冊子と漢文訓読

枕冊子の文体は、大綱としては日記類に通じるであろう。ただその作者清少納言が、当時の女流作家としては格別に漢文の素養が深く、又それを他に誇ろうとする性格であったことから、漢文の故事来歴などを引用した箇所がみえる。又、漢文の訓読文の一部などを引いたりしているが、その引用されている状態から推すと、彼女はその訓読の言葉に習熟し、内容を消化していたことが窺われるのである。

本章では、枕冊子における漢文訓読語の影響を、その取り入れ方の段階を三段階に分けてみていくことにする。

第一節　漢文訓読文をそのまま引用したもの

当時の訓読文には、枕冊子の文一般には用いられないような特殊な語彙・語法などが多く存在したのであり、訓読語というものは特異な際立った言葉であったと考えられる。枕冊子には、このような生の訓読法を取り入れた箇所が幾つかある。

○楊貴妃の、帝の御使にあひて泣きけるかほに似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」などいひたるは、（三五）

右の傍線の部分は、白楽天の「長恨歌」からの引用である。その一節に、

玉容寂莫涙闌干（トジテ）、梨花一枝春帯雨（タリヲ）

とある。この例は当時の訓法そのままの形であり、作者清少納言が何ら意を加えることなく引用したと認められるものである。即ち、「梨花」「一枝」は字音でよみ、「なしのはな」「ひとえだ」のような和訓は用いなかったと思われる。当時の訓読の習慣では右の如く漢字二字の熟詞たる名詞は、これを字音語とすることが例であったからである。

○つねに「『女は己をよろこぶもののためにかほづくりす。士は己を知る者のために死ぬ』となむいひたる」と……（四七）

この例は、『史記』の刺客列伝の中の晉の豫讓のことば

士為知己者死、女為説己者容。今智伯知我。我必為智伯報讎而死。

よりの比較的長い引用である。上文と下文が入れ代わって

いるということはあるが、訓読文によく見られる対句表現や、又「かほづくりす」という語がそのまま用いられていることからみて、原典を忠実に引用した例とみてよいであろう。

第二節　漢文訓読語を日常会話語に言い和らげて引用したもの

以上二例は、原漢文の訓読文を全く忠実に転写したと考えられるものであるが、次に原漢文の意味を取っただけで、必ずしも訓読文には忠実でないと認められる類に関して述べる。この類の中でも、訓読文に遠いものと近いものの差はあるであろう。

○頭の中将斉信の、「月秋と期して身いづくか」といふことを　（一三〇）

右は、『和漢朗詠集』下、雑、懐旧「右大臣報恩願文」に見える詩句よりの引用である。

金谷酔花之地　花毎春匂而主不帰
南楼嘲月之人　月与秋期而身何去

「いづくにか」が枕冊子では「いづくか」となっている。が、これは「いづくにか」が音便を生じて「いづくんか」となり、表記の際に「ん」が脱落して「いづくか」となったもので、この「いづくか」の例は訓読文の中にもみえる。又、この「いづくか」のように下に続く「去る」を省略して中断するような訓法は、平安時代の訓点資料には見い出されない。「てか」で省略終止するのは、仮名文学類の例である。源氏物語にもよく見られる例である。即ちこの部分は、引用された部分だけについて言えば古訓点のままであろうが、実際には「去る」があったのを省略して和文脈的に表現したものと考えられる。

○檜の木、またけ近からぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の聲をまなぶらむもあはれなり。　（三八）

右は、「方干」による。

長潭五月雨含水気　孤檜終宵学雨聲

「雨聲」が「雨の聲」と和文脈に言い和らげてある。又、「まなぶ」は、一般の和文では「まねぶ」という語で表わされている訓読特有語である。源氏物語の中には見えるが用法や用例が限られているもののみである。

○鶴は、いとこちたきさまなれど、鳴く聲の雲居まできこゆる、いとめでたし。　（三九）

『詩経』の「鶴鳴」による。

鶴鳴九皐　聲聞于天

この例も、作者清少納言が原典の漢文の意を消化して、訓読文を和文脈に言い和らげて引用した例とみてよかろう。

以上三例　漢文訓読語を日常会話語に言い和らげて引用したものを挙げてきたが、これらよりもわかるように、これらの中でも訓読文に近いものと遠いものとの差がみられる。が、何れにしても作者清少納言が、当時訓読文を通して相当な量の漢文の文献に親しんでいたことが窺えるのである。

第三節　漢文訓読特有語を用いてはあるがその部分の背景として特定の漢文の文献は想定されないもの

本節では、漢文訓読特有語なるものをいくつか拾ってみて、これらがその部分の背景として特定の漢籍が想定されない場合、本文中にどのようにあらわれているかをみていく。

〔たまたま〕一例。（和文では普通「たまさかに」を用いる。）

〔しか〕三例。（和文では訓読でいう「しか」に当たるところは多く「さ」を用いている。）

〔かたな〕一例。（これに対応する和語としては「たち」という語が使用される。）

この他、〔いまだ〕〔いぬ〕〔います〕〔にあらず〕〔ごとし〕〔あに…や〕等の語が僅かに見られる。そして、これらは何れも、比較的和文にはいりやすい語や、男性会話文中にあるもの、僅かではあるが他の仮名文学作品にも例をみることができるものである。

以上、枕冊子の中で漢文の訓読と関係あると見られる部分について三段階に分けて述べてきた。これより推考するに、㈠。㈡の段階に於ては、その引用されている状態から、彼女はその訓読の言葉に相当習熟し、内容を消化していたと言うことができるようである。又、三の段階で殆ど漢文訓読語が見られないということとを考え合わせてみると、やはり作者清少納言の意識のうちには、「この語、この文は漢文訓読口調である」という自覚があって、明白にその使い分けをしていたのであり、更に又、それが特殊な表現効果を生ずるということをも自覚していたのではないかと思われる。

第二章　大鏡と漢文訓読

大鏡の文体を見ると、それは和文的な語彙、語法が中核を為しているのではあるが、その中に、訓読文だけにしか見られず和文にはない所の、いわば訓読特有語の語彙、語法が指摘できる。つまり、大鏡本文中にはかなりの数の訓読特有語が見い出されるが、これは作品の性格の相違にもよるが、第一章に述べた枕冊子に於けるように、或る特定の漢籍の引用文等に用いられているのは稀で、その殆どは地の文に断片的に用いられている。

本章では、大鏡における漢文訓読語を、それに対応する和語の現われ方の状態などと共に、その使用状況を見て行く。

一

まず最初にここでは、漢文訓読語が本文中にどのくらい、又どんな訓読特有語が見られるか、その状態を表にしてみる。本文の分類はテキストの目次による。頻度数10以上の語は各語ごとに全体における使用状況をみたが、10以下の語については、「その他」に一括して書き入れた。

	序	五十五代 文徳天皇	五十六代 清和天皇	五十七代 陽成院天皇	五十八代 光孝天皇	五十九代 宇多天皇	六十代 醍醐天皇	六十一代 朱雀院天皇	六十二代 村上天皇	六十三代 冷泉院天皇	六十四代 円融院天皇	六十五代 花山院天皇
語数	8	0	0	2	0	2	1	1	1	2	2	1
行数	106	17	17	28	13	41	16	16	22	9	16	40
ゴトシ	1											
シム												
イマダ	1			1		1				1		
イマス	1										1	
コレ				1		1	1	1	1	1	1	
ソレ	1											
ユエの類												
シカの類	シカシカ2 シカリトイ ヘドモ1											シカ 1
その他	スベカラクハ 1											

	六十六代 一條院天皇	六十七代 三條院天皇	六十八代（当代） 後一條天皇	間語	左大臣冬嗣	太政大臣良房	右大臣良相	権中納言従二位 左兵衛督長良	太政大臣基経	左大臣時平	左大臣仲平	太政大臣忠平	太政大臣実頼
	2/9	2/44	3/20	12/94	1/7	2/22	0/7	1/4	2/49	26/171	0/12	5/40	5/99
			1	2									2
										10			
				1						1			
										1			
	2	1	1							2		3	
					カルガユエニ 1			ガユエニ 1		ノユエ 1 ソノユエハ 1			ソノユエハ 1
				シカレバ 1 シカレドモ 1		シカハアレド 1				シカジカ 1			
		マナコ 1	スベカラクハ 1	ハジメテ 2 タトヘバ 1 アルイハ 2 ヨリシテ 1 ザレ 1		ハジメテ 1			トモニ 1 イハユル 1	トモニ 2 スコブル 2 キハメテ 2 ハナハダシ 1 スミヤカニ 1 ザル 1		ナラビニ 1 ナニカハセム 1	アルイハ 1 ニアラズ 1

雑々物語（大団円）	藤原氏の物語	太政大臣道長	右大臣道兼	内大臣道隆	太政大臣兼家	太政大臣公季	太政大臣為光	太政大臣兼通	太政大臣伊尹	右大臣師輔	左大臣師尹	太政大臣頼忠
21/451	46/365	20/416	2/86	8/322	7/140	3/71	2/41	10/211	9/332	11/275	15/312	3/86
1	1	8		1				1	1	2		
2	19	1		2								1
4	3				1			1				
5	1										2	
			1	1	2	2	1	1	1			
	4	2						3	1			
ソノユエハ 1	カルガユエニ 2 ソノユエハ 2		ソノユエハ 1					ソノユエノユエ 1		ソノユエハ 1		
シカ 2 シカシカ 1 シカソカ 1 シカルベキ 1	シシカレバ 1 シカアレドモ 1 シシカカアリ 1 シシカカジカ 4	シカ 2 シカアレバ 1		シカ 1 シカジカ 1	シカ 2 シカジカ 1		シカシカ 1		シカジカ 1 シカバカリ 1	シカジカ 1 シカルベキ 1	シカ 1 シカジカ 4 シカシカ 4	
キハメテ 1 スナハチ 1 ハジメテ 1	ナラビニ 2 オモヒハカリ 1 イハク 1 アルイハ 1	キハメテ 1 イハムヤ 1 ニシテ 1 ズシテ 1 ザル 2		ズシテ 2	ニシテ 1	ニアラズ 1		ハジメテ 1 ズシテ 1	イズクニカ 2 ワレラ 1 ニアラズ 1	イハムヤ 2 キハメテ 1 ワレラ 1 イハユル 1 トモニ 1	キハメテ 1 ズナハチ 1 ハナハダシ 1 ニアラズ 1	ハジメテ 1 イズクニカ 1

後日物語	1/65						シカ 1	

（表一）

このように、訓読特有語なるものを拾って分類してみると、確かに品詞による差異は見られるが、かなりの数の訓読語が大鏡全体に断片的に用いられているということがわかる。

更に、分類した文の長短をも合わせて考察していくと、一般に帝王物語（本記）には訓読特有語はあまり見られず、「コレ」「イマダ」などが僅かにみられる。これに対して大臣物語（列伝）、藤原氏の物語・雑々物語・それに序、間語の部分には極めて多種の訓読特有語が見い出される。この現象は文の長短にも勿論よるであろうが、後者に叙述的な部分が多いという大鏡の性格にもよるであろう。この表より更に、序・間語・左大臣時平・藤原氏の物語の部分に比較的まとまって訓読特有語が使われているということが言える。

二

ここでは、大鏡本文中に訓読語がどのように見られるか幾例かを取りあげてみていく。それとあわせてこれらの訓読語についての略述。（省略）

大鏡には訓読語が数多くはいり込み、又それは、話し手・聞き手に関係なく一様に用いられている。

三

次にここでは、大鏡に訓読特有語とそれに対応する和語がどれだけの比率で使われているか、又大鏡の作者が、それぞれの語を意識的に使い分けているのか否か、ということを見ていくことにする。まず、大鏡の中に見える訓読特有語とそれに対応する和語の主なものを拾って表にして見てみる。

	語	数	語	数	語	数
訓読特有語	ゴトシ	22	シム	35	ザル	3
和語	やうなり	57	す・さす	1,347	ぬ	1
訓読特有語	アルイハ	4	イマダ	14	ザレ	1
和語	あるは	3	まだ	22	ね	2

（表二）

右表をみると、大鏡には他の仮名文学作品には殆ど見い出すことのできない訓読特有語「ゴトシ」「シム」「イマダ」などが、これらに対応する和語「やうなり」「す・さす」「まだ」の数には及ばないながら数多く見られるのである。そして更に、「アルイハ」「ザル（ザレ）」の語も、それに対応する和語「あるは」「ぬ（ね）」とほとんど同じ比率で用いられていると考えてよいようである。

次に、対応するこれらの語を大鏡本文全体の中で、その現われ方を見ていくことにする。分類は表一と同じであるが、これらの語が見られる箇所のみ抜き出した。（但し、「す・さす」は、その数が非常に多く、かつ全体にわたるので省略した。）

	序	五十七代 陽成院天皇	五十九代 宇多天皇	六十三代 冷泉院天皇	六十五代 花山院天皇	六十七代 三條院天皇	六十八代（当代）後一條天皇	間語	左大臣時平
ゴトシ	1						1	2	
やうなり			1			1			
イマダ	1	1	1	1				1	1
まだ					1				
アルイハ								2	
あるは									
ザル									1
ぬ	1								
ザレ								1	
ね								1	

雑々物語（大団円）	藤原氏の物語	太政大臣道長	右大臣道兼	内大臣道隆	太政大臣兼家	太政大臣公季	太政大臣兼通	太政大臣伊尹	右大臣師輔	左大臣師尹	太政大臣実頼	太政大臣忠平
1	1	8					1	1	2		2	
10	6	7	1	8	2	1	3	8	1	7	1	
4	3				1		1		3			
4	2					1	3	3		2	1	1
	1										1	
		2						1				
		2										
		1										

（表三）

この表より考えるに、訓読特有語がいくつかかたまって現われている箇所も二、三あるが、大体に於て全体に散在している。又、訓読特有語とそれに対応する和語がともに用いられているという箇所が多く、大鏡の作者が、これらの語を意識的に使い分けていないことが推される。

四

先に、大鏡本文中に訓読語は大体一様に分散していると述べたが、左大臣時平伝や太政大臣道長伝などのように、かなりまとまってみられる箇所が幾つかある。本項では、この部分の訓読語について少し考察してみる。

時平伝は、菅原道真の左遷のこと、そこからくる漢詩文の引用、その中に訓読語が多くみえるということ、更にここでも多く訓読語が用いてある藤原氏の物語を見ると、ここは神仏に関係がある。このような部分に訓読語が多く見られるということは、大鏡の作者が、意識的にこれらの部分に訓読語を多用し、その表現効果を自覚していたとも考えられる。しかし、これらの部分に訓読語が多用してあるもののそれに対応する和語も全く同じような使い方がなされているのである。

つまり、作者はこれらの荘重な場面に訓読語を多く用いてその場の雰囲気を作ってはいるが、それはその時作者のうちにあった訓読語彙が無意識のうちに現われたのであって、この語は訓読特有語であると意識して用いたのではなく、この場面だからこの語は訓読語を用いるという程の自覚はなかったのではないかと思われるのである。

このように、大鏡は他の純粋な仮名文学作品と同じように和文脈が基を成してはいるが、本文中に漢文訓読語が多く入り込んでいる。これは、当時男性が学問をする時、学問と言えば漢文の文献などは、漢文訓読を介してその知識を得たこと、従って訓読語彙が作者の中に深く入り込んでいたこと、このことにより大鏡の作者が和文脈で文章を書こうとした際にも自然とその場面等により訓読語を用いたのではないかと推される。又これから逆に、大鏡の作者は、不詳ではあるが男性であり、男性であるからこそ、和文を書こうとする際にもこのように漢文訓読語の影響が強く見られるのではないかと言えそうである。

結論

本論で平安時代の仮名文学作品「枕冊子」と「大鏡」を取りあげ、その各々が訓読語とどのような関係を有するかを論じてきた。当時の日常会話語に基づいて書かれたと考えられる代表的な仮名文学作品「枕冊子」には、漢文訓読語が意識的に使い分けされており、作者清少納言は女性ではあるけれども漢字の素養をもち、訓読文にも親しんでいたことが枕冊子引用文中よりわかる。しかし、作者が男性であろうと考えられる「大鏡」には、全体にわたって訓読語が無意識に使われている。この二つの作品にみられる漢文訓読語の差異は、その大綱が日記文学に通じると考えられる枕冊子と、歴史物語大鏡の差でもあろうが、作者が女性と男性との違いということも大きな点であると思われる。

何れにしても、この二作品を見てもわかるように、平安時代の仮名文学作品には、いろいろな質の差こそあれ漢文訓読語の影響が、強く見られると言えるようである。

※尚、テキストには、日本古典全書『枕冊子』『大鏡』を使用し、引用箇所、段などすべてこれによるものである。

参考文献（略）

鷗外と中国文学

―「雁」を中心として―

濱田朝子

目次

はじめに
第一章　鷗外の漢学修得過程
第二章　「雁」と中国文学
　第一節　「大鉄椎伝」
　第二節　「小青伝」
　第三節　「金瓶梅」
むすび
語注
参考文献
資料　(1)大鉄椎伝
　　(2)小青伝

はじめに

鷗外の作品も鷗外に読まれた中国小説も数多く、鷗外と中国文学の全てについて研究するのはなかなか困難である。それ故ここでは特に「雁」を取りあげ、「雁」に現われる三つの中国小説、即ち「大鉄椎伝」「小青伝」「金瓶梅」について、少し詳しく研究してみようと思う。

第一章　鷗外の漢学修得過程

鷗外に親しまれた個々の中国小説について考察するには、その前提としてまず鷗外の漢学素養の性格が如何なるものであったか、又鷗外の傾倒した中国文学がどのようなものであったかに触れる必要がある。

前田愛氏は東京大学附属図書館の鷗外文庫の中に、鷗外が繙読した中国小説類の大半が所蔵されていることに注目し、それらの調査研究を「鷗外の中国小説趣味」[注1]として纒めておられる。その考証によれば、医学生時代を中心とし